

新牟田加藤神社・島阿弥陀堂・島観音堂の建築的特徴に関する考察

早野 彰人* 森山 学**

On the architectural characteristics of Shinmuta-Kato-jinja shrine, Shima Amida-do and Shima Kannon-do
Akito Hayano*, Manabu Moriyama**

A purpose of this paper is to clarify the architectural characteristics of Shinmuta Kato-jinja Shrine, Shima Amida-do and Shima Kannon-do in Yatsushiro-shi.

Shinmuta Kato-jinja Shrine was founded in 1866, and the main shrine was built in 1886. After Sankaku-ji Temple was abolished, Shima Amida-do and Shima Kannon-do were founded. It is thought that the Amida-do was built in 1842.

The main shrine of Shinmuta Kato-jinja Shrine has family crests of Kato Kiyomasa. The front shrine is architecture had module by span of Rokunima. The Amida-do and the Kannon-do are architectures have a module by scale of Kyoma-Tatami.

キーワード：新牟田干拓，加藤清正，神仏分離，平成 28 年熊本地震

Keywords : Reclamation at Shinmuta, Kato Kiyomasa, Separation of Shinto and Buddhism, 2016 Kumamoto earthquakes

1. 緒言

新牟田加藤神社・島阿弥陀堂・島観音堂は、熊本県八代市新牟田御堂須 797 にある。同境内には石廟もあり、いわゆる神仏習合を残した状況で、さらにその諸殿・諸堂が並び立つ様は興味深い風景を構成する。これらについてこれまで建築的調査は未実施であった。

本研究ではこれら諸殿・諸堂の建築的特徴と神仏習合を残す理由を明らかにすることを目的とする。

本論は奈良木神社・観音堂に関する拙著⁽¹⁾同様、八代市内の神仏分離を残す境内に関する研究の一環である。この他片野川妙見社（北方宮）・薬師堂（東片町）、金立院（本町一丁目）も神仏習合を残しているが、いずれもこれまで研究されてこなかった。八代市内の神社建築の研究自体が、未着手の状況である⁽²⁾。

研究方法は文献調査並びに実測調査である。実測は平成 27 年 12 月 27 日に観音堂，阿弥陀堂，神社本殿，石廟，平成 28 年 1 月 20 日に神社拝殿，同年 5 月 27 日に境内，8 月 7 日に玉垣の実測調査を行った。

2. 配置

2.1 周辺環境

新牟田新地は慶長年間（1596-1615）に「肥後國誌」では加藤忠広⁽³⁾，「八代郡誌」では加藤清正⁽⁴⁾，「千丁町史」で

は両氏⁽⁵⁾によって干拓されたとしている。造成年代については、唯一、佐藤伸二氏が「清正公信仰と干拓」⁽⁶⁾で慶長 13（1608）年と断定している。とすれば清正の没年（慶長 16（1611））以前で家督も譲っていないため、清正代の造成となる。

干拓前、現境内の地は「シマ」と呼称される島であった。現在も字名として「島」が伝えられている。ここは島貝塚の遺跡でもあり、古墳時代から平安時代の生活具や貝殻が発見されており、当時の集落跡と推察されている⁽⁷⁾。

シマについては、「八代郡誌」に「浮島に有名なる地藏尊あり、釈迦院開祖、驛善大師尊信厚く、遠路日を定めて参拝せられたり、然りと難海上風波時に到ることあり、浮島に達すること能はず、故にこの地に花を立て、遙かに地藏尊を拝跪したりと云う」⁽⁸⁾と書かれてある。つまり本来シマの集落には驛善大師が釈迦院を創建した 799 年頃には地藏尊が祀られていたことが分かる。

釈迦院創建後、シマは釈迦院の領地となり、島阿弥陀堂の前身、三角寺が釈迦院の末寺として創建される⁽⁹⁾。

また引用文内の花立て地藏は当社寺より東方向にある。花立て地藏は、昭和 43（1910）年以前の写真と現状を比べてみると台座が埋め立てられているのがわかる（図 1，2）。

その後、新牟田新地の干拓時に加藤神社が創建されたこと「八代郡誌」に記してあり⁽¹⁰⁾、この際、三角寺または島阿弥陀堂・島観音堂と同地に立地されたということであろう。

2.2 境内の配置（図 3（文末），図 4）

境内地は周囲より高くなっている。建物の後ろには用水路が流れ、南東隣には墓地がある。周囲を覆う玉垣は正面

* 熊本高等専門学校専攻科 生産システム工学専攻 2 年

** 建築社会デザイン工学科

〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627

Dept. of Architecture and Civil Engineering.

2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, 866-8501, Japan



図1 花立て地蔵 図2 花立て地蔵
(出典：萩本敬三：千丁村史)(平成28年1月26日撮影)



図7 棟札 図8 奉納写真の部分
(平成28年5月13日撮影) (平成27年12月27日撮影)



図4 境内全景 (平成27年12月27日撮影)



図9 現状の拝殿の妻部分 (平成27年12月27日撮影)



図5 石造門柱



図6 「万願さん」と日露戦争記念碑
(以上、平成27年12月27日撮影)

と南東側にのみあり、全周を覆っていない。鳥居はなく、変わりにもみ切仕上げの石造門柱が立っている(図5)。この柱の側面には扉を固定する金具跡と思われる穴があり、本来は扉があったと考えられる。境内に入って左手に石灰岩の手水鉢がある。

正面から右側に観音堂があり、北西を向く。向き合うように左側に「東万願」の札が安置されている砂岩製の祠がある(図6)。これは新牟田新地干拓の際、加藤氏に従ってきた東万願之助の廟⁽¹¹⁾で「万願さん」と通称されている。

正面には、左側に社殿、右側に島阿弥陀堂が並び建つ。阿弥陀堂はその由来から「シャカイン」、「シャインさん」と通称されている⁽¹²⁾。

その他観音堂横に御大典碑があるが、内容が記されていたであろう箇所が損失していた。神社と「万願さん」の間には日露戦争の記念碑(明治39(1906)年)が建つ。

3. 新牟田加藤神社の建築について

3.1 来歴

祭神は加藤清正である。この土地は加藤氏によって造営された。「その徳をたつとび、当地の氏神としてまつた開拓神である。」⁽¹³⁾とされ、「八代郡誌」では干拓時の建立としつつ勧請年は不明とし、明治11(1878)年に存置を許可されたとある⁽¹⁴⁾。他書⁽¹⁵⁾では慶応2(1866)年創建とある。「今新牟田村ニアリ」とする「肥後國誌」の補遺は大正5(1916)年出版時の加筆である⁽¹⁶⁾。

平成28年熊本地震後、拝殿に置かれた棟札(図7)に、

大持国奉 (不動明王) 大廣目奉 明治十九年四月吉日
南無多宝如来
南無妙法蓮華経 南無日蓮大菩薩 諸国霊場往詣
南無釈迦如来 新牟田村
大多聞奉 (愛染明王) 大増長奉 柴田政吉

とあり、行間余白には判読が難しい「菩薩」等の多数の文字も認められ、法華曼荼羅によるものである。日蓮宗であ

ることから、阿弥陀堂・観音堂ではなく加藤神社のものであり、かつ本尊相当の棟札であることから本殿に関するものと考えられる。このことから、現在の本殿は、創建から間もないものの、明治 19（1886）年の改築と推定する。

また拝殿内の昭和 47（1972）年奉納の写真（図 8）と現状（図 9）を比較すると、当時から以下の点が改修されていることがわかる。①基壇正面にコンクリート製の石段が設置された。②鬼瓦が昭和 47（1972）年以前と異なっていることから、屋根を葺き替えた。③妻飾りの 2 つの家紋の間隔が昭和 47（1972）年以前より離れていることから妻の壁面が補修された。これら補修は、拝殿内の奉名札の記載から昭和 57（1982）年と推定する。

3.2 建築的特徴

新牟田加藤神社は南西 40° の向きに建ち、本殿、拝殿より構成される。以下に実測図面を示す（図 10）。

3.2.1 本殿（図 11）

本殿は桁行一間、梁間一間の一間社流造、棧瓦葺きである。屋根に置き千木、鯉木はなく、棟瓦正面に銅製の桔梗紋と蛇の目紋を取り付ける。いずれも加藤家紋である。

基壇は拝殿、本殿一体の天端をモルタルで固めた布積の石積み基壇である。幣殿はなくモルタル土間に両殿をつなぐ敷石が置かれ、切妻屋根がかかっている。基壇上の周囲に木製玉垣が巡る。建物は内部を埋め戻した巻天端の布石の上に建つ。本殿背面を除いては大床が回る。向拝柱を除き径 165mm（5.5 寸）の丸柱である。地長押、切目長押、内法長押、内法貫、頭貫によって固められている。正面扉は部戸であったが枠部材の変形によって緊結されてしまい開けることはできなかった。

桁行の柱間寸法は芯々で 1793mm（5.92 尺）、内法で 1628mm（5.37 尺）である。梁間の柱間寸法は芯々で 1582mm（5.22 尺）、内法で 1417mm（4.68 尺）であった。向拝柱は 125mm（4.12 寸）であった。

向拝柱の組物は出三斗で、手挟は雲形である。つなぎ虹梁は海老虹梁で、木鼻は獅子鼻である。向拝虹梁の木鼻は象鼻である。中備の墓股は加藤家紋の桔梗紋が正面、同じく蛇の目紋が背面に彫られている（図 12）。妻飾りは大瓶束笈形である。本殿内保管の以前の懸魚には墨書がある。

本殿内の天井は内外陣にわたり一間一花の格天井が連続する（図 13）。内陣境の欄間に鶴が彫られている（図 14）。また、側面の頭貫下の壁板に「へ桁下之板」という墨書がみられた。観音扉には左に桔梗紋があり（図 15）、右に破損しているがおそらく蛇の目紋の透かしがある。内部には加藤清正の神像が安置されている（図 16）。

3.2.2 拝殿（図 17）

拝殿は入母屋造妻入、棧瓦葺きで梁間 3 間、桁行 2 間である。建物は本殿と同じモルタルで固めた基壇の上に建ち、

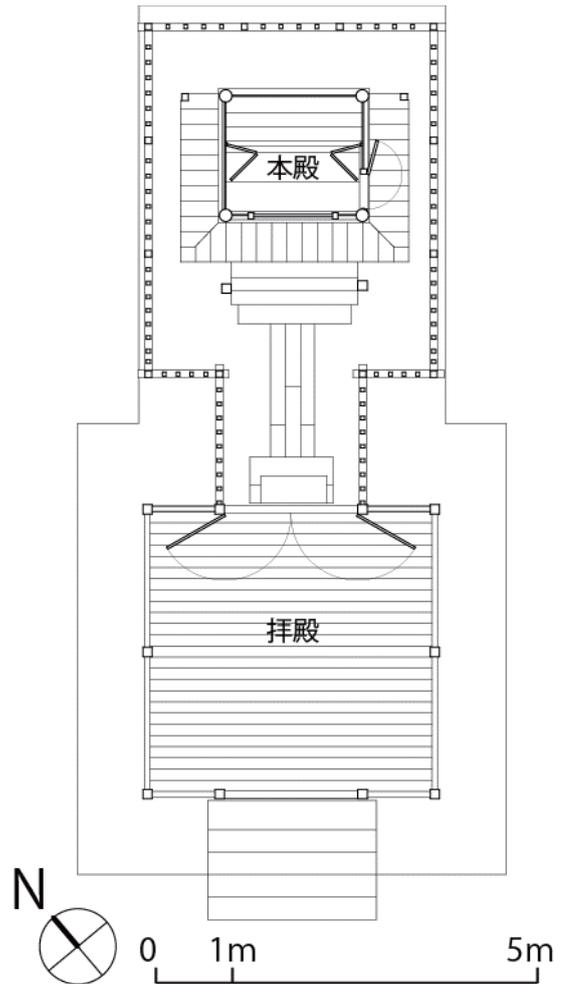


図 10 新牟田加藤神社実測平面図



図 11 新牟田加藤神社本殿（平成 27 年 12 月 27 日撮影）

柱は布石の上に建つ。

桁行の柱間寸法は芯々約 1886mm（6.23 尺）、内法約 1761mm（5.81 尺）である。梁間の柱間寸法は中央が芯々 1876mm（6.19 尺）、内法 1751mm（5.78 尺）、両側が芯々約 947mm（3.13 尺）、内法 825mm（2.72 尺）である。柱寸法は約 125mm（4.12 寸）であった。このことから 6.2 尺を基準とする六二間の柱割りであることが分かる。



図 12 本殿向栞虹梁の墓股（左：正面、右：背面）
（以上、平成 27 年 12 月 27 日撮影）



図 13 本殿の格天井（平成 27 年 12 月 27 日撮影）



図 14 内陣境の鶴の欄間（平成 27 年 12 月 27 日撮影）

天井は格天井で材が真新しく、近年のものと思われる。周囲は吹き放しで腰壁が巡る。

妻飾りは白壁に黒で左に桔梗紋、右に蛇の目紋が描かれている。鬼瓦は前述のとおり、昭和 47 年当時とは異なる。

4. 島阿弥陀堂

4.1 来歴

堂内の奉名札等のうち、最も古いもので明治 31（1989）年 8 月 10 日、ついで大正 15（1926）年 1 月のものであった。建築の修繕に関するものとして、昭和 22（1947）年 5 月の奉名札があり「三角寺修繕費奉納金名簿」と書かれている。前述のとおり、シマには釈迦院開祖・弊善大師が信仰する地藏尊があったと伝えられる一方、釈迦院領であった当地に末寺・三角寺が創建され、室町期には住職がいた⁽¹⁷⁾と



図 15 左観音扉の桔梗

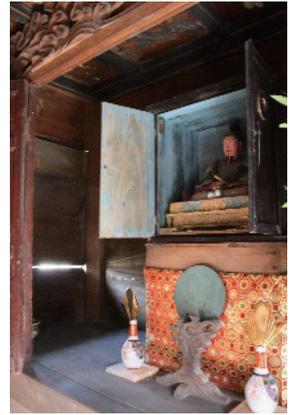


図 16 加藤清正像

（以上、平成 27 年 12 月 27 日撮影）



図 17 新牟田加藤神社拝殿（平成 24 年 1 月 4 日撮影）

も伝えられている。

石原浩氏は三角寺廃寺後に、阿弥陀如来と観音菩薩が加藤神社境内に移されたと推察している⁽¹⁸⁾。一方、加藤神社を慶応 2 年創建とする説から解釈すれば、三角寺（あるいは無住後の阿弥陀堂・観音堂）が社殿に先行すると言える。

木造阿弥陀如来立像の墨書銘に「□時元禄七申戌歳初夏吉日 仏師 樋口□□ 嘉永七申寅八月吉日 奉細工 大仏師熊本新三丁目墨 木野喜三治藤原 道時」⁽¹⁹⁾とある。衣紋線などは平安時代の仏像と同じ表現⁽²⁰⁾であり、石原氏によれば寄木造であること、足の指の彫りが江戸時代の手法であることから、元禄 7（1694）年に平安期の仏像を模倣したと解釈されている⁽²¹⁾。以上から、三角寺は室町期あるいは元禄 7（1694）年を遡る創建と考えられる。

さらに正面の素朴な表情をした鬼瓦に「天保十三年□□」の刻印があることから（図 18）、現在の建物は天保 13（1842）年の改築または改修と考えられる。

4.2 建築的特徴

正面は入母屋妻入で向栞がつき、背面は切妻造で庇がつく。屋根は棧瓦葺きである。正面妻には 9 弁の菊の饅絵があり、彩色されている（図 19）。菊の弁数としては不自然な 9 は阿弥陀如来の九品に通じると考えられる。屋根軒下に小



図 18 島阿弥陀堂正面の鬼瓦（平成 27 年 12 月 27 日撮影）



図 19 島阿弥陀堂正面の鍔絵（平成 24 年 1 月 4 日撮影）

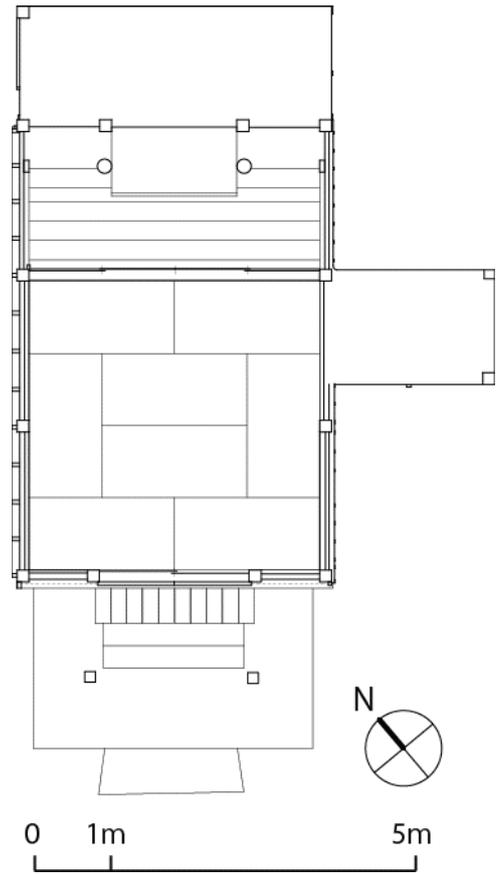


図 20 島阿弥陀堂実測平面図

天井がつき背面では底下に回り込む。

基壇は、向拝では布積みの石積みで天端をモルタルで固めており神社と同じである。身舎は打込ハギを布積みした石積み基壇の上に布石を敷き、その上に柱を立てている。南西向きで、規模は梁間 3 間、桁行 4 間である（図 20）。桁行背面から一間は片流れ屋根が別にかかり建物外側からのみ入ることができる附属部分でおそらく倉庫として使用されている。桁行の柱間寸法は正面 3 間が芯々で約 1991mm（6.57 尺）、内法で約 1834mm（6.05 尺）、背面 1 間がこれより小さく芯々 1503mm（4.96 尺）、内法 1346mm（4.44 尺）であった。梁間の柱間寸法は両側が芯々 927mm（3.05 尺）、内法 770mm（2.54 尺）であった。中央が芯々 2123mm（7.01 尺）、内法 1966mm（6.49 尺）であった。畳敷きの外陣だけをみると、桁行内法 12.65 尺、梁間内法 12.61 尺で、これを畳数 2 で割ると、各々 6.33 尺、6.31 尺となることから、京間畳割であることがわかる。柱寸法は 150～160mm で 5 寸角である。向拝柱は 138～150mm で身舎より一回り小さい。仏壇前柱の丸柱は直径 186mm、190mm である。

向拝柱の組物は出三斗である。つなぎ虹梁は海老虹梁、手挟は波、向拝虹梁の中備は波のひれの内側に花のある蓑股である（図 21）。

外陣内部は大斗絵様肘木がされ、天井は格天井である。



図 21 島阿弥陀堂の向拝の蓑股



図 22 釘隠し

（以上、平成 27 年 12 月 27 日撮影）

釘隠しは菊桜紋である（図 22）。内陣境では組物は出組で拳鼻がつき、蛇腹支輪がつく。虹梁は太い渦巻きに菊が浮かぶ菊水が彫られ、幕末以降の特徴がみてとれる⁽²²⁾。虹梁中央に七宝つなぎの文様の錫杖彫もみられる。内陣境は総じて彩色されている（図 23）。

内陣天井は棹縁天井である。仏壇前柱は丸柱で、出三斗の変形の組物は桢肘木で彫刻された棹縁を受けている。柱、組物ともに極彩色で、装飾のテーマに菊を用いている（図 24）。本尊を中央の厨子に配し、花頭曲線の虹梁がある脇仏壇の左に八代神社、右に誕生釈迦仏像を安置する。



図 23 内陣境 (平成 27 年 12 月 27 日撮影)



図 24 左: 仏壇前柱, 右: 組物 (平成 27 年 12 月 27 日撮影)

表 1 島観音堂の仏像記名一覧

仏像	和歴	西暦	作者
十一面 観音 (本尊)	正徳 4 年正月	1714	大仏師 直元
	享保 17 年 2 月	1732	大仏師 有佐村傳八
	寛政 4 年 8 月	1792	大仏師 宮原吉田平吉 河野勝助
	文化 丑年 9 月	1817	仏師小川住白石竹五郎
	文政 4 年 9 月	1821	大仏師 東肥熊本 新町木野喜三次
脇侍 1	享保 17 年 2 月	1732	有佐村傳八 新牟田村若衆中
脇侍 2	記名なし		



図 27 装飾金物 (平成 27 年 12 月 27 日撮影)

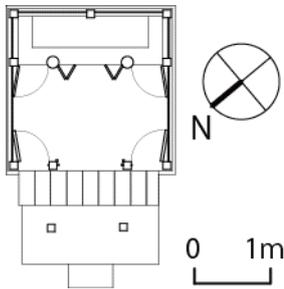


図 25 島観音堂実測平面図



図 26 島観音堂
(平成 24 年 1 月 4 日撮影)

5. 島観音堂 (図 25, 26)

5.1 来歴

創建年, 建設年は不明だが, 堂内の美人画は明治 10 (1877) 年奉納である。昭和 2 (1927) 年出版の「八代郡誌」には, 阿弥陀堂とともに記載されている。

本尊・木造十一面観音菩薩立像と脇侍 2 体の菩薩像の記名を表 1 にまとめる⁽²³⁾。度重なる修理が無住化後とすれば, 地元住民の信仰の厚さが窺われる。

表より, 本尊は正徳 4 (1714) 年作, 脇侍の 1 体は本尊の最初の修理の享保 17 (1732) 年作である。本尊の文政 4 (1821) 年の修理を担当した木野喜三次は, 阿弥陀堂本尊の嘉永 7 (1854) 年の修理も担当している。境内の諸仏像は修理過

程で互に関連しあっており, 長らく同じ管理下に置かれてきたことが分かる。阿弥陀堂の脇仏壇が実質空いており, 観音堂の三尊形式が不自然であることから, 観音堂の脇侍が, 阿弥陀堂の脇侍であった可能性も考えられる。

観音堂のみ長押や土台の装飾金物に鉄が使用され (図 27), 洋釘留めであることから, 日本で洋釘に転換した明治 20~30 (1887~97) 年以降に改修されたことが分かる。

5.2 建築的特徴

宝形造向拝付き葺き瓦葺きで頂部には二段の露盤上に宝珠がつく。露盤の一段目に卍が彫られている (図 28)。

規模は正面 3 間奥行 2 間だが, 背面は 2 間である。正面 3 間の両側は芯々約 518mm (1.71 尺), 内法約 414mm (1.37 尺), 中央一間は芯々 978mm (3.23 尺), 内法 874mm (2.88 尺) だった。背面は芯々約 1007mm (3.32 尺), 内法約 903mm (2.98 尺) だった。側面外陣は芯々 1368mm (4.51 尺), 内法 1264mm (4.17 尺), 内陣は芯々 641mm (2.12 尺), 内法 537mm (1.77 尺) だった。全体では, 奥行が内法 6.29 尺, 幅が内法 6.3 尺で, 京間量割の建築であると分かる。柱寸法は丸柱 157mm (5.18 寸), 身舎が 104mm (3.43 寸), 向拝柱が 98mm (3.32 寸) だった。

建物は砂岩の石積み基壇の上にあり, 土台の上に柱が立ち, 切目長押, 内法長押, 内法貫, 頭貫で固められている。向拝の基壇は天端をモルタルで固められている。



図 28 宝珠



図 29 仏壇境の虹梁

(以上，平成 27 年 12 月 27 日撮影)

向拝の組物は平三斗で，つなぎ虹梁はない．身舎の組物は大斗絵様肘木，正面扉は半部である．

外陣は畳 1 枚を敷き，手前を側板とする．天井は棹縁矢管張天井である．仏壇の前柱は丸柱で，組物は出組，木鼻は拳鼻である．虹梁は木瓜に蓮が彫られている（図 29）．

6. 神仏分離について

明治政府は天皇を中心として国家神道を形成すべく，一連の神仏分離令を發布している（1868（慶応 4～明治元））が，単に仏教だけではなく，明治政府によって権威づけられない神仏ともに廃滅の対象とした．ただし廃仏毀釈の行き過ぎを是正すべく，明治 4（1871）年に神道国教化の方針転換をする⁽²⁴⁾．近隣の貝洲加藤神社では，明治 3（1870）年 6 月 24 日に神仏分離され，村社に列せられている⁽²⁵⁾．明治政府は加藤清正を祭神として認めていることが分かる．

一方，新牟田では社殿と 2 堂が同一境内に現在まで建ち並んでいる．その理由は，阿弥陀堂・観音堂が当時すでに無住の小堂だった点と，おそらく地元住民の信仰が厚かった点が挙げられる．安丸良夫氏は実体として分離されたのは大社寺であり，多数派は形式的分離にとどまったと述べている．さらに神仏分離の実現の条件として神仏分離や廃仏毀釈を推進する存在が必要である点を挙げている⁽²⁶⁾．

また加藤神社の慶応 2（1866）年創建の説について考えてみると，わずか 20 年後の明治 19（1886）年の改築は，創建当初の社殿が本格的なものではなかったと推測できる．

さらに棟札の法華曼荼羅からは，地元住民の意識が，なお神仏習合の状況にあることが推察できる．

7. 熊本地震による影響

八代市内歴史的建造物の平成 28 年熊本地震の影響を平成 28 年 5 月 2～25 日に悉皆調査した．新牟田の社殿と 2 堂は 5 月 7 日に実施した．内部調査は 9 月 7 日に実施した．

本殿は傾斜を測定できていないが後・左方向に大きく傾斜し（図 30），前面右の向拝柱は完全に礎石から後方へ外れ（図 31），身舎柱も浮き上がり．背面左の柱の個所で地長押・切目長押が外れていた．東も同様に後方へずれていた．

拝殿も同方向に傾き，大引・貫が外れ，腰壁と柱の間に隙間が生じた（図 32）．

島阿弥陀堂は内外壁にクラック，剥落があり（図 33），龕子下見板張りの腰壁内も土壁が落ちていた．腰壁の見切り



図 30 震災後の本殿の傾斜（平成 28 年 5 月 7 日撮影）



図 31 本殿向拝柱のずれ



図 32 拝殿腰壁の貫の外れ

(以上，平成 28 年 5 月 7 日撮影)



図 33 阿弥陀堂内壁のクラック



図 34 観音堂の回転

(平成 28 年 9 月 7 日撮影) (平成 28 年 5 月 7 日撮影)

材が柱と接する箇所でも割れていた．軒小天井の腕木と桁がずれ，天井板が外れていた．付属屋の屋根土が落ちていた．

島観音堂は基壇上を建物が反時計回りに回転するかたちでずれていた（図 34）．また左側面の琵琶板が外れていた．

8. まとめ

実測により，①拝殿は六二間の柱割り，②阿弥陀堂・観音堂は京間畳割りであることが分かった．

建設年は本殿が棟札から明治 19（1886）年，阿弥陀堂は鬼瓦と内陣境の造作から幕末以降，天保 13（1842）年の可能性を示唆した．

神仏分離されなかった理由として，その時点で三角寺は無住化した小堂で，加藤神社も本格的社殿ではなかった可能性があること，仏像の修理経歴から地元住民の信仰が厚かったことを挙げた．一方，棟札形式から当時なお地元住民には神仏習合の意識が高かったと言える．

(平成 28 年 9 月 21 日受付)

(平成 28 年 12 月 7 日受理)

参考文献

- (1) 早野彰人・森山学：「神仏習合を残す奈良木神社の建築的特徴と八代の神仏分離に関する考察」, 熊本高等専門学校紀要, 第7号, pp.57-64, (2015).
- (2) 熊本県教育委員会：熊本県の近世社寺建築 - 熊本近世社寺建築緊急調査報告書, pp.182-189. (1987).
下田雅子・北野隆：「八代城下町の町人地に見られる社・堂について」, 日本建築学会九州支部研究報告書, 第36号, pp.365-368. (1997).
原田聡明：「八代神社(妙見宮)本殿の棟札と部材墨書について」, 日本建築学会九州支部研究報告書, 第54号, pp.513-516. (2015).
- (3) 後藤是山：肥後國誌, 下巻, p.348, 新潮社, (1916).
- (4) 熊本教育委員会・石川愛郷編：八代郡誌, p.448, 臨川書店, (1927).
- (5) 千丁町史編纂委員会：千丁町史, p.39, 千丁町教育委員会, (2005).
- (6) 九州文化財研究所：九州文化財研究所創設20周年記念～生誕450周年記念によせて～「加藤清正の実像と英雄像の受容」, p.20, (2013).
- (7) 千丁町史編纂委員会：前掲書, p.19.
- (8) 熊本県教育委員会・石川愛郷編：前掲書, p.601.
- (9) 塩崎秋義：八代の伝説, p.68, 塩崎秋義, (1975).
- (10) 熊本県教育委員会・石川愛郷編：前掲書, p.448.
- (11) 萩本敬三；千丁村史, p.52, (1968).
- (12) 千丁町史編纂委員会：前掲書, p.27.
- (13) 萩本敬三：前掲書, p.147.
- (14) 熊本県教育委員会・石川愛郷編：前掲書, p.448.
- (15) 角川日本地名大辞典編纂委員会：角川日本地名大辞典43 熊本県 総説・地名編, p.625, 角川学芸出版, (2009).
- (16) 後藤是山：前掲書, p.259.
- (17) 塩崎秋義：前掲書, p.68.
千丁町史編纂委員会：前掲書, p.27.
- (18) 石原浩：加藤神社・阿弥陀堂・観音堂, (2011).
- (19) 同書.
- (20) 植田路：「千丁の歴史を訪ねて」史蹟・伝承と干拓新地, pp.102-103, 千丁町教育委員会, (1990).
- (21) 石原浩氏へのヒアリング (平成28年1月8日).
- (22) 川内長成：寺社の装飾彫刻中国・四国・九州・沖縄編, p.85, 日貿出版社, (2014).
- (23) 植田路：前掲書, pp.102-103.
- (24) 早野彰人・森山学：前掲書.
- (25) 永松豊蔵編著：鏡町史, 下巻, pp.704-706, 鏡町, (1982).
- (26) 安丸良夫：神々の明治維新, p.59, 岩波書店, (1979).

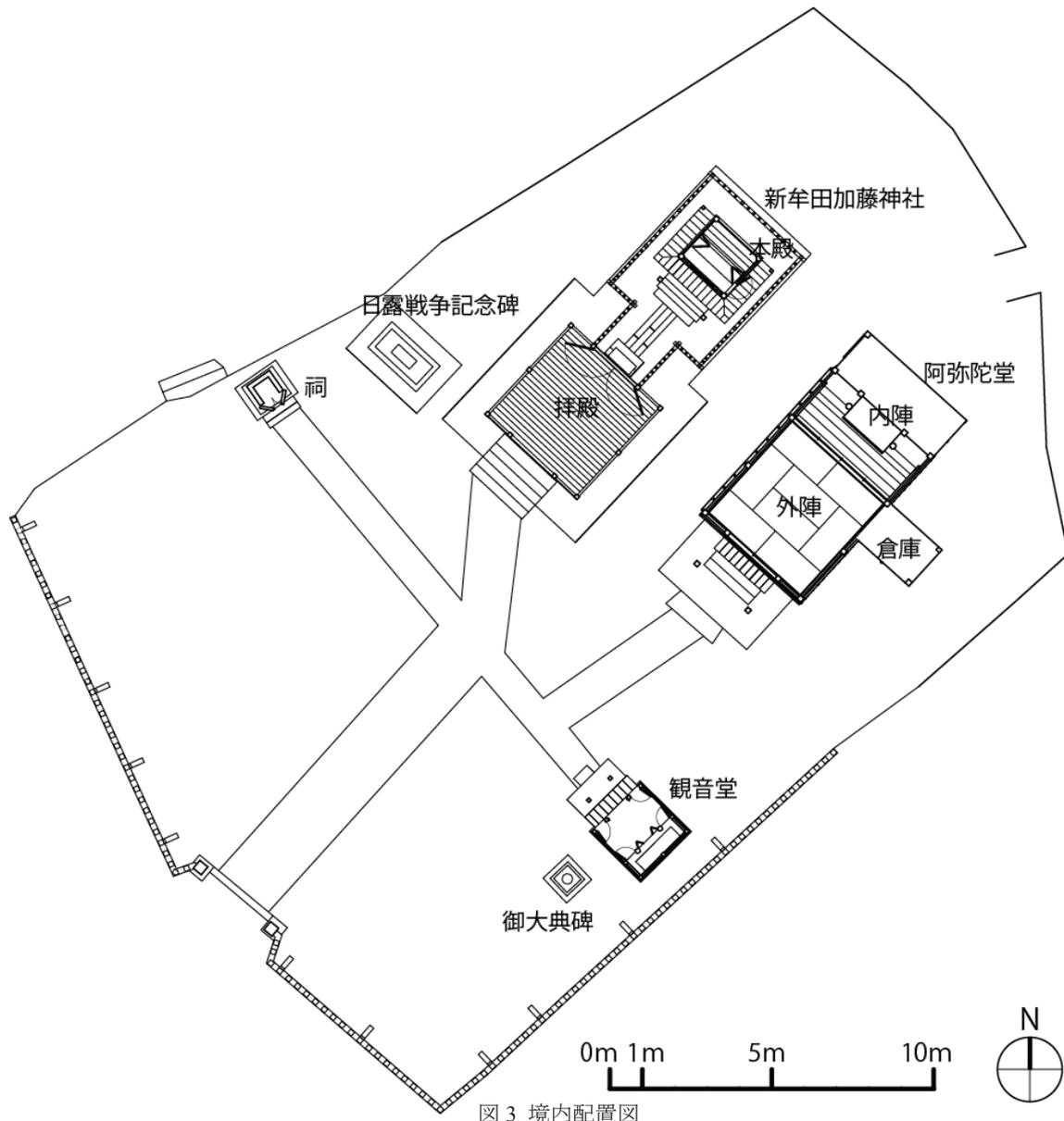


図3 境内配置図